

Title	日本博物学史覚え書 IX
Sub Title	Notes on natural history in Japan (IX)
Author	磯野, 直秀(Isono, Naohide)
Publisher	慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会
Publication year	2000
Jtitle	慶應義塾大学日吉紀要. 自然科学 No.28 (2000. 9) ,p.60- 81
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10079809-20000930-0060

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

日本博物学史覚え書 IX

磯 野 直 秀

1 『みやびのしをり』にみる江戸の鳥

江戸時代後期には各地の名所案内が、何巻もの大作から一枚刷まで数多く刊行された。その一つに『みやびのしをり』と題する小冊子がある。縦17.0・横7.5cm、市販の一筆箋より一回り小さい折本で、本文15面。大きさ厚さともに、持ち歩きやすい作りである。著者は「きゝすのや則房」という人物で、本名はわからない。今回調べた国会図書館蔵初版本（特1-3144、1冊）の刊記は、「天保五年午〔1834〕正月／江戸神田鍛冶町／北嶋順四郎」で、表紙には「天保五年五月、則房主人〔著者〕恵之」と、旧蔵者による書き入れがある（注1）。

本書は江戸の花鳥風月の名所案内で、「梅」「蛩」「月」などの項目を月別に並べ、それぞれに該当する地名・園名・寺社名などを挙げるという一般的な手法だが、驚いたのは項目の多さだった。項目はじつに150に及び、この手のものでは群を抜く。草木は言うにおよばず、鳥なども後出のようにいろいろ挙がっているし、風月も曙や朧月から逃水・納涼・枯野・落葉まで入っている。挙げられている名所の数も多く、梅54・糸桜88・単桜63などで、総計は1000を超える。ただし、地図は入っていないし、花暦のように花の見頃を記すこともない。

とくに興味深いのは、鳥の名所であった。鳥は、鶯・雲雀・野駒・雉子・帰雁・杜鵑〈ホトトギス〉・水鶏（クイナ）・初雁・鶉・千鳥・鷗・水鳥・鴨・鶴・鳩〈ニホトリ〉・鷓鴣〈ウ〉・紅鶴〈トキ〉・鶴〈コウ〉・朝鳥の19項。

そのうち、野駒（ノゴマ）は下総小金で、さすがに江戸からやや離れるが、それ以外では、いまは姿を消した鳥が江戸の町中か、その周辺で普通に見られたことがわかる。たとえば、キジは王子・西ヶ原・隅田の先関屋の里・雑司ヶ谷・駒場野、ホトトギスは駿河台・番町御堀端

〒232-0066 横浜市内南区六ツ川 3-76-3-D210, 慶應義塾大学名誉教授: Notes on Natural History in Japan (IX), by Naohide ISONO (76-3-D210, 3-chome, Mutsukawa, Minami-ku, Yokohama 232-0066, Japan; Professor Emeritus, Keio Univ.) [Received Mar. 30, 2000]

●本稿では、引用文の漢字と仮名に現行字体を用い、濁点と句読点を適宜加えた。引用文中の（ ）は原注、〈 〉は原本の振り仮名、【 】は脱字・送り仮名の補足、[]は磯野による注と補足である。仮名が続くとき、特定の語に下線を付して読みやすくした場合もある。

辺・忍ヶ岡・根岸御隠殿の辺・谷中・小石川初音の里（指ヶ谷町辺）・高田毘沙門堂の林・四谷大番町より新屋敷辺・ハッ山、クイナは不忍池・浅草田圃・浅茅ヶ原・同所玉姫稻荷社辺・吾妻の森・本所十間川、ツルは本所・小松川・向島・小梅・亀割・三河島・千住・品川大森、コウノトリは上野中堂・不忍池・浅草寺・東本願寺・猿江重願寺、トキは寺島白髭社森・千住の名が挙がっている。

一方、岩崎灌園著『武江産物志』（文政7年=1824刊）では、キジは王子と駒場、ホトトギスは高田の里・谷中・芝幸稻荷^{さいわい}・小石川初音の里・駿河台・ハッ山、クイナは本所十間川・吾妻森、ツルは本所・千住・品川、コウノトリは葛西、トキは千住、と地名が少ない。

『みやびのしをり』の挙げる地名は江戸の東部に多く、西部は少ない印象を受ける。これは、著者の行動範囲を反映しているのだろう。その点を割り引く必要はあるが、ともあれ、クイナ・ツル・コウノトリなどは江戸東部のかなり広い地域に生息していたようである（注2）。トキが、『武江産物志』の千住のほか、寺島白髭社森（現墨田区向島3丁目）辺でも見られたというのは新知見であった。

鳥ではないが、蛭は江戸川・関口芭蕉庵の辺・高田姿見橋の辺より落合へ行道・根岸用水通り・谷中宗林寺蛭沢・王子下道・番町御堀端、鹿は志村の原・徳丸の原とあることを付け加えておく。

（注1）北嶋順四郎は書肆。なお、『国書総目録』によれば、天保6年版もある。

（注2）江戸の西部にもツルは結構いたらしい。漢学者松崎^{こうどう}慊堂の『慊堂日歴（日録）』天保元年（1830）12月16日条から翌2年1月にかけて、鶴の記事が下記のように続く（平凡社東洋文庫版の読み下し文による）。

十二月十六日 午後、白鶴あり。前三五後三、北方より山を掠めて下り、而して南し、哀唳低回すること久しうす。

十二月十七日 十一鶴、十三鶴、朝陽に映じて北飛して去る。

十二月十八日 玄鶴は初め十、後に七、哀唳して北に至る。

一月 一日 玄鶴五六羽あり。南方より来り鳴き、盤旋して西す。

一月十一日 白鶴三は澗田に下り、唳声はなはだ清む。

一月十二日 白鶴三、玄鶴四、また別に一小鶴あり。昨日澗田に下り、今なお止まる。……二鶴飛び去る。

白鶴はソデグロヅル、玄鶴はナベヅルと思われる。この頃、慊堂は江戸の羽沢（現渋谷区広尾2丁目）に住んでいたので、「山」はいま日赤病院や聖心女子大がある高みである。他の年に鶴の記事は無く、この年は目立ったのかもしれないが、とくに珍しいとか、驚いたような感想は記していない。

2 天保年間の園芸書

江戸時代の日本は世界一の園芸大国だったが、時代によって流行は移り変わった。大別すれ

ば、初期には椿や楓などの樹木が中心だったが、正徳・享保期の菊を境に草類がもてはやされはじめ、文化・文政頃からは花だけでなく、斑入葉が珍重されるようになって、増田繁亭（金太）著『草木奇品家雅見』（文政10年刊）と水野忠暁著『草木錦葉集』（文政12年刊）という斑入植物中心の大作2点が世に出た。

それを受けて天保期（1830～43）には、万年青（オモト）や錦蘭など、特定種類ごとの品評会がしばしば開かれ、その目録や相撲見立て番付、あるいは図譜が次々に現われる。ところが、表題からは中身がわからなかったり、いまは馴染みの薄い植物が扱われていたりして、戸惑うことが少なくない。そこで本稿では、以下年代順に8種類の草類について、主要な著作をまとめておく（注1）。弘化元年（1844）以降については、続報で扱う。

●万年青（オモト）

この頃小型の斑入葉をもつオモトが珍重され、小万年青とか小不老草の名で呼ばれ、多数の一枚刷錦絵などが刊行された。

『小不老草名寄七五三』（一枚刷、水野忠暁撰・関根雲停画、天保3年3月序）：15品の色刷（錦絵）で、それぞれ品名だけを記す。「七五三」は逸品の意味。天保3年9月15・16日に、江戸蔵前八幡社で小不老草の品評会が開かれ、そのときの出品物を15品ずつ集めた1枚刷の錦絵が、上と同じく水野忠暁撰・関根雲停画で少なくとも6種類刷られた。題は『小おもと名寄』『小不老草名寄手鑑』などで、それぞれ品銘と出品者を記す。ただ、題名は同じでも、用いた変体仮名が違ったり、図柄は変わらないが銘（捺印らしい）が異なるものがある。水野忠暁は幕臣で、四谷に住み、草木の栽培については植木屋が舌を巻く技量を有していた。関根雲停は幕末で一二を争う江戸の博物画家。

『金生樹譜』（刊本、長生舎主人著、天保4年6月序；別題は万年青譜）：オモト36品の色刷画に品銘と所蔵者を記す。「金生」は著者の造語らしく、ある個所で「金生樹譜」の語の右に「きんせいじゆふ」、左に「かねのなるき」の振仮名をつけている。序によれば、万年青・黄金花（フクジュソウ）・百両金（タチバナ）・蘇鉄（ソテツ）・南天燭（ナンテン）・松葉蘭・石斛（セッコク）が金の成る七福神。いずれも高価で取引されたのであろう。

本書の序文末の2印は「信充」「柳闇陳人」と読め、同じ著者の『金生樹譜別録』（園芸一般、刊年不明）の見返しに「柳庵蔵版」と記されていることから、「長生舎主人」は栗原信充の筆名とわかる。幕臣で故実家、名は信充、通称孫之丞^{のぶみつ}、字伯行、号柳庵・柳闇。『古今要覧稿』の編集にも加わった文人である。このことは園芸関係者のあいだでは早くから気付かれていたらしい（注2）が、『年表日本博物学史』や『国書総目録』『国書人名辞典』では、長生舎主人が栗原信充とは記していないので、一筆しておく。

●桜草（サクラソウ）

江戸では荒川沿いの戸田河原や浮間ヶ原の自生地に桜草狩に行くのが古くからの娯楽で、町中を売り歩く桜草売も風物詩の一つだった。『桜草作伝法』（著者・執筆年不明の栽培書）によれば、桜草の愛玩は享保の頃から始まって天明～寛政期に流行し、文化初年から優劣を競う花合せも行われるようになったという。しかし、桜草だけを扱った書物は少ない。

『桜草勝花品』(写本、葦溪主人著、天保6年3月下旬序；東京国立博物館、和1018)：86品の彩色図で、銘だけを記し、来歴などの注釈は無い。そのなかに、花卉に多くの切れ目がある品や、「極黄」の銘をもつ黄色の品がある。イギリスのサクラソウは黄色というから、それがすでに移入されていたのだろうか。葦溪主人は坂本浩然^{こうねん}。紀州出身の医師・本草家・画家で、名は直大、通称浩然、号浩雪・葦溪主人など。江戸に住み、曾占春に本草を学んだ。桜の写生で名高く、刊本に『菌譜』がある。

●石斛(セッコク)

セッコクは岩上や老樹に着生する蘭で、古くから薬に用いていた。葉の斑入品が園芸品として流行したのは天保の初年頃かららしい。

『長生草』(刊本、秋尾亭主人著、天保6年2月跋)：まず石斛の栽培法を述べ、ついで名品55点の形状を略記し、うち33点を色刷で示す。著者は京都の人だが、本名は未詳。

『ちとせの友』(刊本、林蘭軒著、天保7年2月奥書；東京大学総合図書館、XA70-84)：栽培法と奇品5点の色刷画を載せる。うち2品は関根雲停筆。図数が少ない版もある(注3)。著者は江戸の人らしいが、詳細は不明。

●松葉蘭(マツバラン)

暖地に生育する小型のシダ。古生代の無葉類の生き残りで、生きた化石の一つである。枝が細かく分かれてホウキのような姿を呈し、枝には退化した小葉を付けるだけであり、根は無い。枝型の変化した品がもてはやされたが、斑入品もあった。「竺蘭」とも呼ばれた。

『松葉蘭譜』(刊本、長生舎主人著、天保7年6月跋)：松葉蘭122品の銘を記し、特徴を略記、うち60点を色刷で示す。『金生樹譜』で述べたように、著者は栗原信充。同人の『東都松葉蘭譜』はこの前年に作った筆写本で、松葉蘭102品を図示しており、本書のもとになったと考えられる。

『松蘭譜』(刊本、玉青堂撰・貫河堂画、天保8年秋刊；東京大学総合図書館、T83-197)：90点の色刷画で、図はマツバランの図譜類のうちもっとも優れているという。孢子囊のつく位置や枝の捻れの有無など、形状によって8グループに分け、それぞれ品名と産地だけを記す。産地は豊後26・紀州23・豊後以外の九州18など。著者は三河碧海郡新堀村の富豪。姓は深見、名は延賢、号玉音堂・廬山など。

●錦蘭・ビロード蘭

錦蘭はラン科の一種で、別名鷓鴣蘭・鶉蘭、現和名はミヤマウズラ(深山鶉)。葉の表が暗緑色の地に白い網紋があって美しく、それを鶉の羽模様に見立てたのが現和名という。ビロード蘭(天鵝絨蘭)はミヤマウズラと同属で、現和名はシュスラン(繻子蘭)。葉の中央に1条の白線があるのが特徴。葉に短い毛が密生してビロードやサテン(繻子)のような光沢を有するのが名の由来である。両種とも斑入や、逆に白部が緑化したものなど、葉の変異が多い。品評会では両者が入り混じって出品されたが、錦蘭の方が圧倒的に多いのが普通だった。

『にしきかがみ』(刊本、著者・刊年不明)：斑入錦蘭34点の色刷図譜。成立年は記されていないが、天保9年9月5日に江戸で開かれた「錦蘭奇品集会」の目録(次項の刊本に収録)に掲

載された品銘と一致するものが多いので、その会の逸品を図譜にしたと思われ、刊行も天保9年か10年であろう。

『錦蘭品さだめ』（刊本、帆分亭編？）：天保9年9月から10年1月のあいだに江戸・京都・大坂・池田（摂津）で開催された錦蘭・ビロード蘭品評会の目録・相撲見立番付計6点の一枚刷を覆刻した本。図は無い。おそらく天保10年の刊行で、当時の盛況がよくわかる。国学者で狂歌作者でもある桜井光枝が跋を記しているが、その跋によれば、錦蘭の発見者は江戸駒込千駄木町団子坂の植木屋森田六三郎（帆分亭）であった。『金生樹譜』の項で記した栗原信充の弟子である（注4）。

●瞿麦（ナデシコ、撫子）

古く『万葉集』にもナデシコの和歌がいくつもあり、また『枕草子』や『源氏物語』には日本に自生するカラナデシコ（ヤマトナデシコ）とともに、カラナデシコ（唐撫子）の名が見える。以来、両種とも愛玩されてきたが、江戸時代初期には色変わりや八重咲きもあった。のうち花卉が長く、糸状に細裂した伊勢撫子が伊勢で出現し、天保年間（1830～43）から弘化年間（1844～47）にかけて、その系統を中心に撫子が流行した。

『瞿麦譜』（写本、波羅山人著、天保10年4月序；東京国立博物館、和1020）：93品の彩色図譜。「本糸咲大輪」「笹葉燕尾、又魚尾」のように花形を記すだけで、花銘や出所は添えない。花卉の先端が細裂せず、単に細長く延びて、いわゆる伊勢撫子とは異なった品が多い。年記は「己亥」とあるだけだが、本著者の別図譜『牡丹譜』が天保7年作と推定される（注5）ので、己亥は天保10年と思われる。著者の本名は不明。

『瞿麦形状品』（写本、朧月庵主人著、天保11年成；注6）：別名、『瞿麦品類并培養法』。ナデシコの葉や全体の形を11類、花形を17類に分類し、ついで瞿麦栽培史と培養法を述べる。図は無い。著者の本名はわからない。

●三角草（ミスミソウ）・洲浜草（スハマソウ）

ミスミソウは日本固有種で、山地の樹陰に生えるキンボウゲ科の多年草。白花が普通だが、桃色や紫がかったものもある。三角草の名は、三裂した葉の各片の先が尖ることに由来する。その変種スハマソウは、葉の裂片の先が丸く、それを洲浜に見立てて名付けられた。どちらの花も春先に咲くので、雪割草の別名がある。両者とも享保18年（1733）刊の『地錦抄附録』に名が出ているから、古くより知られていた。花色の変った品を愛好するようになったのは天保の頃かららしいが、図譜は下記の1点しか管見に入っていない。

『長楽花譜』（写本、桜溪主人著；東京国立博物館、和2370）：本草家の阿部喜任が天保12年春に序を記している。桜溪主人の本名も原本の成立年も不明。彩色図に花銘を記したスハマソウの図譜（注7）で、花色は白・紅・紫・絞りなど、花びら（植物学的には萼^{がく}）の数も6～10と変化がある。原著者の描いた図は65品と思われ、喜任が数品を追加している。

●岩檜葉（イワヒバ）

イワヒバは関東以南の暖地に産するシダ。山中の岩上に着生し、イワマツ・イワグミ・イワゴケ・万年松などとも呼ばれる。漢名は卷柏（長生不老草、万歳）で、古くからの薬用植物だ

が、その斑入品が園芸品として天保末年から江戸で流行し、幕末に及んだ。
『東都岩檜葉名寄取組』（一枚刷、天保14年9月刊；注8）：51品のイワヒバの銘鑑。

（注1） 所蔵館を記していない資料は国会図書館蔵。その請求記号は『[[改訂増補国立国会図書館支部上野図書館所蔵] 本草関係図書目録』（つかさ書房、1976年）参照。

（注2） 前島康彦、『樹芸百五十年』，改訂版，富士植木，1993年。

（注3） 国会図書館蔵特1-2395本（刊本）と特7-451本（写本）は、図が「玉匣丸」1点しかない。

（注4） 注2文献。

（注5） 波羅山人著『牡丹譜』（写本，東京国立博物館，和1021）の序に，「北沢村鈴木左内の牡丹園の品を写生した」旨が記されており，その序末尾に「丙申」の干支が記されている。この鈴木左内は，文政・天保の頃の諸書に名が見える多摩郡上北沢村の名主鈴木左内に違いない（たとえば『草木奇品家雅見』中巻37丁裏）ので，丙申は天保7年（1836）であろう。

（注6） 東京国立博物館蔵『花菖蒲・瞿麦培養法』（和107）に所収。成立年は『国書総目録』の記載に基く。

（注7） 白井光太郎，雪割草，『白井光太郎著作集』，3，302-306，科学書院，1986年。

（注8） 白井光太郎，いはひばの栽培，『白井光太郎著作集』，3，269-272，科学書院，1986年。本節に取り上げた資料のうち，一枚刷『東都岩檜葉名寄取組』だけは原本を見られなかったので，白井の報文に拠った。

3 『新渡花葉図譜』

国会図書館伊藤文庫に『新渡花葉図譜』（特7-147，2冊）という写本がある。著者は渡辺又日菴。寛政4年（1892）に三河奥殿藩主松平乗友の次男として生まれ，叔父の尾張藩渡辺綱光の養嗣子となり，尾張藩の家老をつとめた人物である。名は規綱，通称半蔵・兵庫頭，号又日菴・一楽園ほか。のち出家して茶道・狂歌・陶芸に通じた。本草は水谷豊文に学び，嘗百社の物産会にも出品し，飯沼慾斎とも交流があった。明治4年（1871）1月18日没，年80。

本書は，天保末年から明治3年（1870）のあいだに名古屋に入った渡来園芸植物130品の彩色図譜で，品名だけでなく，来歴や形状などを注記する。識語によると，伊藤圭介の孫篤太郎が，大正3年（1914）に本書の原本を又日菴の子孫から借り，絵が巧みだった母の小春（圭介の五女，このとき71歳）に頼んで転写してもらったという由緒をもつ（注1）。

上述のように，来歴が記されている品が少なくない。それは必しも渡来年ではないが，少なくとも名古屋に持ち込まれた年がわかり，渡来植物の資料として有用と思われる。そこで，以下にいくつかの事例を紹介しておきたい。「」のなかは原本記載の品名と来歴で，その後に現和名や図に示されている花色などを記す。図譜には伊藤篤太郎が学名を記入している場合があり，それも参照した。配列は原本の順で，ほぼ年代を追っている。

- 「レリイナリキス 天保十二丑歳（1841）、蕃舶載来ル……江戸ニテ義訳シテ水仙アヤメト云」：スイセンアヤメ？
- 「ネブリ草……天保十三寅歳仲春〔2月〕、摂豊嶋郡木部邑住季兵衛者、行肥長崎、則所携帰、八月花開」：オジギソウ（注2）
- 「漢種宿砂、ガラंगा 嘉永四年（1851）舶来」：ハナシュクシャ（花縮砂）
- 「コンチヨロ 嘉永初年舶来」：バンウコン（蕃鬱金）
- 「クワエンサウ 嘉永年間、蘭舶ノ新渡」：カエンソウ（火炎草）
- 「ナガルボーム 安政四年（1857）舶来」：グラジオラス、橙色
- 「ホクシヤ 安政五戊午年六月、初【メテ】摂州池田ヨリ持来」：フクシヤ、ツリウキソウ（釣浮草）
- 「キンギョウ草 文久元年（1861）、池田ヨリ来ル」：キンギョソウ、赤・黄・赤黄2色
- 「ホルヒエス 文久二年、大坂花戸ヨリ尾州ニ来、新舶来」：マツバボタン、紅・黄・白・赤白絞り・黄色赤覆輪など各種
- 「メリケン産マツ虫艸 文久二壬戌年五月、横浜ヨリ来ル」：セイヨウマツムシソウ
- 「ルリヤス 文久三年癸亥ノ春、江戸ヨリ来ル」：サンシキカミツレ（三色カミツレ）、ハナワギク
- 「イギリス新渡、文久三亥年」：カーネーションの1品種、濃紅。カーネーション類は、江戸初期に渡来。
- 「西洋アラセイトウ 元治元年（1864）四月、江戸ヨリ来ル」：アラセイトウ、赤花
- 「ガラંગリヤウ 元治元年四月、江戸ヨリ来ル」：フウリンソウ（風輪草）、紫花
- 「丁子瞿麦 慶応二年（1866）丙寅三月、江戸ヨリ来」：ヤグルマギク、紫
- 「小蝶花 慶応二丙寅年冬、江戸ヨリ来。横浜舶来」：パンジー、原種に近い品
- 「フシヤシントウ 慶応三年丁卯渡ル」：ヒヤシンズ、橙色
- 「サルビア 横浜舶来、慶応元丑年、花戸ヨリ」：サルビア
- 「国替リホクシヤ 慶応四戊辰、尾州ニ来ル」：フクシヤ、ツリウキソウ（釣浮草）
- 「銀銭花 明治元年（1868）、新舶来」：クロタネソウ（黒種草）
- 「ヂギ草 明治三庚午年四月、熱田ニテ手ニ入ル。舶来ナリ」：ジギタリス

*

*

*

同じ著者に、『一之鳥居 渡辺又日菴本草図譜』という著作がある（渡辺又日庵、木村陽二郎・遠藤正治編『吉川芳秋著作集』、437-440、八坂書房、1993年）。現在名古屋市東山植物園の吉川文庫に収められているが、これには本書と共通するレリーナルキス、キンギョウ草、ホルヒエスなどが所載されている。しかし、この『又日菴本草図譜』が天保年間から万延元年（1860）頃までの写生であるのに対し、本書は約半数が文久元年（1861）～明治3年（1870）の図である。また、弘化・嘉永年間の渡来あるいは写生の品で、『又日菴本草図譜』にありながら本書に含まれないものも多い。この2つの図譜は、深く関連しながらも別の図譜と見なせる。

両者の成り立ちについては、今後さらに検討したいと考えている（注3）。

（注1） 吉川芳秋による「伊藤圭介翁家系図」（『吉川芳秋著作集』，p. 122，八坂書房，1993年）には、小春が明治13年に没したことになっているが、本書の篤太郎識語によると、亡くなったのは大正11年（1922）11月で、享年79であった。

（注2） この注釈では、天保13年（1842）2月に摂津木部村の季兵衛（植木屋だろう）が長崎に赴いてオジギソウを携え帰ったという。一方、京都の山本読書室がまとめた『指俣草ノ記』（国会図書館，特1-436）には、天保13年春、読書室の門人笠戸恕節が長崎出島でオジギソウの種子を手に入れて読書室に送ってきたので、それを蒔いたところ発芽・生育して3月25日の読書室物産会に展示した旨が記されている。季兵衛の件と笠戸氏が種子を送ってきた話が何処かで結びつくのか、それとも独立してほぼ同時にオジギソウが持ち帰られたのか、いまは判断材料が無い。

（注3） 『又日菴本草図譜』については、岐阜の遠藤正治氏から御教示を頂いた。この場を借りて、御礼を申し上げたい。

4 『しきのくさぐき』

題名からは中身の見当がつかない資料の閲覧を図書館で申し込み、いざ手に取って見ると碌でもない本でがっかりすることが多いが、時には思いがけない掘出物に出会うこともある。国会図書館の目録に「しきのくさぐさ」の題名で登録されている写本（白井文庫，特1-2074，2冊）は、後者の典型的な例だった。

上記の書名から、これは「四季の草々」で、草類の図譜か季節別の解説だろう、そう思って請求したが、本が出てきてみると図譜ではなく、草類の専書でもない。不思議に思い、改めて表紙の題名をよく眺めると、書名が読み違えられていたことに気付いた。題は平仮名で書かれているが、目録作成者は最後の1字「き」を「さ」と読み誤っていた。正しい書名は、「しきのくさぐき」であった。一方、本文の内題には「式茎」とある。つまり、「しき」は「四季」ではなくて「式」、そして著者は「茎」を「くさぐき」と読んだらしいのである。

では中身はというと、後に説明するように、主文は少々変わった形式の歳時記であった。そして、掘出物は、その歳時記の付録に含まれていた「枇杷嶋互市産物考」という資料だった。この資料は青物市場の目録という珍しいもので、『白井光太郎著作集』第3巻の「九十六年前の枇杷島市場に現はれたる園芸植物」に、ほぼ全文が翻刻されている（注1）。そこで原本を見たかったが、『国書総目録』には収録されていない。可能性のありそうな所を当たってみても、探し出せない。なかば諦めていたところへ、探し物が突然現われたのだった。

その出現資料を詳しく取り上げたいが、それは長くなるので別の機会に譲り、いまは取りあえず『しきのくさぐき』の概略を記しておきたい。

本書の著者は尾張藩医だった野村立栄（初代）。美濃の舎人家に生まれ、野村立見の養子となった。名は元幸・劉莢，通称舎三郎・立栄（初代），字子玉・伯正，号は見能庵・健翁・三扇

堂など。文政11年(1828)9月14日没、年78。門下に水谷豊文がいる。

本書は2冊から成るが、どちらが本来の第1冊かは不明である。ここでは仮に、冒頭に内題をもつ方を第1冊としておく。

*

*

*

【第1冊】

表紙：「文政十一年」の年記がある紙片が貼付され、また「しきのくさぐき草稿」「健翁纂」と墨書されている。健翁は野村立栄の号の一つ。

内題：「式茎 尾張 見能庵識(又一作健翁)」……見能庵は立栄の号の一つ。

①「四季の動物性食品」(11丁；注2)

四季別に食用魚介禽類の品名約200を記し、「いか、五月まで十三品程あり」のように、属品の数など短い注を加える。②の農作物に対応する動物性食品のリストである。最後に「魚鳥其外年中其時分御定之事 寛文五乙巳年[1665]正月 公儀」が付属しており、月別に数件の食品を記すが、その意味するところは不明。

②『枇杷嶋互市産物考』(22丁)

名古屋の枇杷嶋青果市場に出荷される品を「穀・蔬菜・菜・筍并菌・果・蔬・雑品」に大別して品名を挙げ、品種・産地・特徴・優劣などを注記する。『白井光太郎著作集』第3巻に翻刻が所収されている。ただし、この翻刻は品名をすべて挙げているものの、注記の個所には省略・誤記が少なくないことがわかった。また、白井が文政11年(1828)成立としたのは表紙の貼紙かららしいが、後記のようにこれは誤りで、本文の記述から「産物考」は文政7年(1824)頃の著作と思われる。

③「御上り御授米」(1丁)……「上白、御用人衆已上」など、尾張藩の家臣に配られる米の品級ほか。

*

*

*

【第2冊】

表紙：書き込みは無く、「三扇堂 しきのくさぐき 全」の題箋のみ。三扇堂は立栄の号。

内題：なし。

①「式茎序」(2丁)……肝心の序は1字も無い。「式茎序」と題だけ記して、後で序文を書くつもりだったのが、そのままになったらしい。

②「四季活套」(1丁)……雨が多い年は果実の出来が悪いなど、年ごとの一般的な傾向。

③「二十四気」(1丁)……二十四節気の一覧表。

④「しきのくさぐき」(50丁)

これが本資料の主文で、万年型の歳時記である。正月節気の「立春」・正月中気の「雨水」・2月節気の「^{けいちつ}啓蟄」……と、二十四節気によって1年を24分して、各時期に該当する開花・鳥の訪れ・^{しゅん}旬の食品・農作業・年中行事・衣替え等々の項目が記されており、それが直前の

節気・中気から何日目に当たるかが示されている（注3）。二十四節気は太陽曆的要素だが、実際の月日は太陰曆なので毎年変動する。そこで、それぞれの節気中気や開花日などに、その年の陰曆の日付を記した紙片を貼付け、次の年には次年の日付を記した新紙片に取り換えるようになっている（前年分の紙片は該当頁の下部に貼って保存してある）。

このように使うものなので、年ごとに表紙の貼紙も替えることになる。第1冊表紙の「文政十一年」の紙片も本来は翌年は貼り替えるものであったが、著者が文政11年（1828）に死去したので現存の貼紙が残った。したがって、それをもって本書全体や、第1冊中の「枇杷嶋互市産物考」を文政11年成立とするのは間違っている。本文と頭注などの年記を勘案すると、この万年歳時記は文政元年頃に、「産物考」は文政7年頃に書かれたらしい。

- ⑤「桜品」（20丁）……桜の和歌や、品種の注釈、故事など。著者は桜が好きだったらしい。品種の項は全42品で、形状の特色のほか、尾張での所在地も挙げる。大半は⑥に図がある。

⑥「桜の彩色図」（7丁）

桜53点の図は、『花ぐはし』（かぐわし；銭屋金将撰、寛政7年刊）の図をもとにしたものが半数近くあるが、形・色彩とも『花ぐはし』より優れる。

⑦「桜の和歌の集録」（7丁）

- ⑧「京都花時候」（2丁）……池坊より配られた花暦の写しで、桜の名所ごとの開花見込み。桜以外の花樹についても記す。

- ⑨「文政十年亥春花時候」（1丁）……岐阜で配った花暦の一枚刷の貼り込み（後半は写し）。

- ⑩「江都花暦」（4丁）……江戸の花暦の写し。

*

*

*

書名の漢字表記と思われる「式茎」の含意はよくわからない。「式」は定め・決まりを示すから、「年間の決まり事の記録」のような意味であろう。「式」は「四季」に掛けているのかもしれない。

書名はともかく、歳時記「しきのくさぐき」と附録「枇杷嶋互市産物考」は、名古屋周辺の四季の変化を示す有用資料に違いない。第1冊冒頭の食用魚分類・禽類の目録も参考になる。とくに禽類は、当時どのような種類が食べられていたかがわかる好資料と思う。

（注1） 木村陽二郎編、『白井光太郎著作集』、第3巻、科学書院、1986年。

（注2） 見出しが無い場合には、[] 内に内容を示しておく。

（注3） 正月節の項に「正月七日 誕生日祝」とある。これが著者の誕生日らしい。

5 『食物伝信纂』の原著と増補本

元禄8年（1695）、稲生若水^{いのう}（1655～1715）は加賀藩主前田綱紀に、自編『食物伝信纂』12巻を献上したが、いま伝わる『食物伝信纂』には2種類の写本がある。

第一（A本）は国会図書館181-295本（2冊）。本文冒頭に「金沢 臣稲義 奉」と記されて

いる。本書は食用野草と蔬菜計191品について、漢名を見出しとし、漢書での異名、ついで俗名（和名のこと；方言を含む）を挙げ、漢書における記載を引用し、ときに若水の注解を添えたものであり、これが献上本の写本に違いない。杏雨書屋蔵杏1425本（2冊）も同本である。

第二（B本）は、国会図書館特1-1524本（5冊、注1）、内閣文庫184-104本（12冊）、同184-105本（10冊）、同184-115本（8冊）、上野益三旧蔵本（3冊、1～3巻欠）など。本文冒頭に「平安 若水稻義彰信甫編集／北藩 蘭浦内山覚順訂補」とある（注2）。本書は若水の原著を内山覚順が増訂したもので、叙述形式と品数はA本と変わらないが、漢異名、俗名、引用文献が増補され、若水の注解（若水云……）のほかに、覚順の注記（順按……）が多数存在する。覚順の序跋は無く、いつ増訂したかはわからない。

A本として国会図書館181-295本、B本として内閣文庫184-104本を選び、任意に選んだ同一の25品についてAB両本を調べた結果を下に示す。数値はそれぞれ25品の合計であるが、若水注記の数以外は、いずれもB本で大幅に増加していることが明らかである。

種別	調査した資料	異名	俗名	引用文	若水注	覚順注
A本	国会 181-295	45	41	64	9	0
B本	内閣 184-104	98	51	189	9	26

稻生若水の原著を増訂した内山覚順は若水の四男で、加賀藩医内山覚仲（1673～1742）の養嗣子となった人である。名は義泰、通称覚順、号蘭浦・菊溪。『国書人名辞典』は「生年未詳、天明3年（1783）5月没」とし、上野益三著『年表日本博物学史』は「正徳3年（1713）生、天明2年（1782）没」とする。いずれにしても、若水の長男が宝永元年（1704）生まれ（注3）なので、元禄8年（1695）の『食物伝信纂』献上時に覚順は生れていない。したがって、増補を行なったのはかなり後年であろう。

この原著（A本）と増補本（B本）の区別は、従来明確にされていなかったように思われる。たとえば、上野益三著『年表日本博物学史』は献上の個所に増補本を挙げているが、これは明らかに誤りである。

（注1） 国会図書館特1-1524本は、一部に脱落があるように思われる。

（注2） B本では、内山覚順の号として、巻1・2に蘭浦、巻3以降に菊溪が使われている。

（注3） 杉山義一、稻生恒軒・若水の墓誌銘について、山田慶児編『東アジアの本草と博物学の世界』、下巻、299-327、思文閣出版、1995年。

6 『百花種芸録』

『百花種芸録』は雷首山人^{ましここれつね}猿子惟常が編纂した総合的園芸書で、栽培技法だけでなく、活花から造園にも筆が及ぶ。序跋は無いが、国会図書館特1-1873本巻5の奥書には天明7年（1787）8月16日の日付がある。一方、特1-102本の文は特1-1873本を補訂したと思われ、また上巻19丁ウ（「七備之六」の章）に「今年庚戌」（寛政2年＝1790）の記載があるので、天明

年間に一応の形が整い、さらに手を入れて寛政年間に仕上げたと推測される。

『国書人名辞典』によると、著者は生没年未詳、名が惟常・鴻、通称太兵衛、字子漸、号雷首・雷首山人。江戸の人で、新発田藩に仕えて監察となり、江戸本所別荘（百花園）の吏を兼務した。博覧で詩文を能くし、園芸を好んだ。

本書は僅かな数の写本で伝えられるが、どうやら完全に揃った資料は存在しないらしい。今回、写本のうち4点を調べ、一応全体像を再構成できたと思うので、それを表1に示しておく。

表から明らかなように、本書は大きく4部から構成される。第1は「三要」で、天地人併せて「三」の意味らしい。「三要之上」が「天」で、気象とその予報ないし占い。「三要之中」が

表1 『百花種芸録』 諸本の構成*

巻**	類別	章題	東博 和2373 5冊	国会図 特1-1873 1冊	国会図 特1-102 2冊	内閣文庫 199-369 2冊
一	三要之上	天象之説	○			
二	三要之中	花之地宜	○			
三	三要之中	諸州奇木珍草	○			△
		諸州物産	○			△
		艸木方言大略	○			
三	三要之下	花之人功				○
四上	六務之一	草木性状	○			○
	六務之二	種植位置	○			○
四下	六務之三	移花転埭	○			○
	六務之四	澆灌得宜	○			○
	六務之五	培養可否	○			○
	六務之六	整頓刪科	○			○
五	七備之一	分栽有時		○		○
	七備之二	扦插易生		○		○
	七備之三	圧条可分		○		○
	七備之四	接換有妙		○		○
	七備之五	過貼巧合		○	○	
	七備之六	下種及期		○	○	
	七備之七	収種貯子		○	○	
(六)		種盆取景			○	
		養花挿瓶			○	
		花香耐久			○	
		贈花致遠			○	
		花木器用			○	

* ○, 存在; △, 一部のみ存在

**各資料に示されている巻次。ただし、(六)は仮に付けた巻数

「地」で、地理・地勢や土の性質が中心だが、話は造園にも及ぶ。「三要之下」が「人」で、園芸家や園芸にまつわる逸話。

第2の「六務」と第3の「七備」は栽培技法。栽培一般から挿木・挿芽・種々の接木・輸送など。総論的な叙述が多く、個別の種類ごとの記事は少ない。

第4は仮に「巻六」とした部分で、これは活花の話であり、芳香の保ち方や遠方までの輸送、ならびに用具についても説明する。

本書は中国の園芸書、とくに『花暦』『秘伝花鏡』『群芳譜』の引用（原文と和訳）が主軸で、それに日本の園芸書の記載や、自己の経験を付け加える。花の図は無い。

漢書の引用が主体の本書のなかで異質なものは、巻3「三要之中」の「諸州奇木珍草大略之事」「諸州草木金石等物産大概之事」「草木方言大略之事」の3章である（表では略題を用いた）。「諸州奇木……」は、梅8・桜12・松12・竹10等々、各地にある計95の名木の名称と所在、特徴などを記す。本州が中心で、四国はわずか1件、九州と蝦夷地は皆無である。「……物産大概之事」は各地の名産品のリスト、「艸木方言……」は文字どおり方言を列記したもの。このうち「艸木方言……」は越谷吾山編『物類称呼』（安永4年刊）の丸写しで、ほかの2件も既存書から抜き出したように思える。「……物産大概之事」は磯貝舟也著『日本鹿子』（元禄4年刊）とかなり共通しているが、それだけが種本ではないらしい。一方、「諸州奇木……」の由来はまだ特定できていない。

本書は日本と風土の異なる地で書かれた漢書が中軸なので、実際にどれだけ役立ったか疑わしい。もっとも、引用が豊富なので、漢書の記載を知るには便利だったかもしれない。

7 大窪昌章の採薬行

江戸時代後期の博物家のうちで採薬にもっともよく出かけたのは、尾張の人々ではなかろうか。しかし、特定の個人についてみると、その採薬行の全容が必しも明らかではないようである。そこで、大窪昌章（注1）について多少調べたことを、まだ不完全ではあるが、本報に報告しておきたい。使用したのは以下の資料で、資料A③以外はすべて昌章の採薬と関連する。

●資料A：『諸国採薬記』（国会図書館，特7-391，1冊：自筆本，戸田寿昌旧蔵）

採薬品の目録で、次の3件より成る。採薬で得た草木の名称と特徴を「イハブキ 葉岐多キモノ」のように記すが、いずれも詳しい日程はわからない。

①文政4年（1821）7月，越前国白山採薬，208品。

②文政12年（1829）5月，伊勢国多度山・美濃国養老採薬，322品。採集地別。

③文政12年7月，木曾御嶽山とその周辺の採薬，131品。採集地別。岩屋平右衛門・相原駒吉の採薬で，大窪は同行していない。

●資料B：『諸国採薬記』（国会図書館，特7-387，1冊：戸田寿昌写，^{にわ}丹波修治旧蔵）次の5件から成る。④と⑤は，古くから知られている。

①……資料A①と同じ。

②……資料A②と同じ。

③天保2年(1831)6月, 近江国伊吹山採薬記。相原駒吉同行。人足代・里程・採薬日記・伊吹山の地志・267点の採薬品目録・方言の記録・聞き書などと, 記載事項が細かく分かれている(注2)。

④天保7年(1836)4月, 美濃国錦織山・恵那山などでの採薬記: ③と同じように諸事項を分けて記載。採集品は487点(注3)。

⑤同年7月, 美濃国加子母・木曽御嶽山・継母嶽などでの採薬記: ③と同じように諸事項を分けて記載。採集品は365点。

●資料C:『昌章草木集』(国会図書館, 849-21, 2冊: 村野氏写)

自園に栽培した約2660品の目録で, 文政元年(1818)から天保4年(1833)まで入手の年次別になっており, 誰から貰ったか・誰と交換したか・どの植木屋から買ったかなど, 入手先を明記している(注4)。採薬行で得た分はまとめて記載。そのうち, 文政5年の美濃国金花山(26品), 同6年の伊勢国多度山・東国山(26品), 同9年の美濃国郡上八幡(53品), 天保4年の美濃国高須山・山崎山(31品)での採薬は, 資料A・Bに含まれていない。大東急記念文庫蔵『草木集』が自筆原本。

*

*

*

表2は, 以上の資料に記載されている大窪昌章の採薬行をまとめたものである。ここでは, そのうち天保2年(1831)の伊吹山採薬の行程を付記しておく。

6月4日: 相原駒吉とともに名古屋を出立, 琵琶嶋より清洲・稲葉・萩原を経て大垣で宿泊。

6月5日: 大垣から垂井・関ヶ原を経て, 上野村に泊まる。

6月6日: 雨で上野村に滞在。

6月7日: 上野村から伊吹山へ登る。夜, 上野村へ戻る。

6月8日: 上野村から伊吹山へ登り, 中腹を右手へ回る。上野村の宿に戻る。

6月9日: 上野村を離れ, 春点宿・関ヶ原を経て, 墨股に宿泊。

表2 大窪昌章の採薬行

年月日	主要な採集地	資料	注記
文政4年7月	越前国白山	A B C	日程の詳細は不明
文政5年	美濃国金花山(金華山)	C	日程の詳細は不明
文政6年	伊勢国多度山・東国山	C	日程の詳細は不明
文政9年	美濃国郡上八幡	C	日程の詳細は不明
文政12年5月上旬*	伊勢国多度山・美濃国養老	A B C	日程の詳細は不明
天保2年6月4日~10日	近江国伊吹山	B C	相原駒吉同行, 日程記載
天保4年6月17・18日	美濃国高須山・山崎山	C	行程の詳細は不明
天保7年4月24日~5月3日	美濃国錦織山・恵那山	B	御薬園御用, 日程記載
天保7年7月27日~8月17日	加子母・御嶽山・継母嶽	B	御薬園御用, 日程記載

*Aでは「5月」, Cでは「5月1日多度山, 5月6・7日養老辺」となっている。

6月10日：墨股を出立し、萩原・稲葉・清洲を経て、名古屋へ帰る。

以上のように、天保2年6月4日に名古屋を出て、同10日に帰名しているのだが、これに関連する興味深い資料が存在する。それは注2に記した『伊吹山採薬記』中の「天保二年卯五月勢州榊原へ入湯願之覚」である（注5）。これは同年5月、大窪昌章自身が持病治療のために榊原での入湯の許可を尾張藩に願い出た願書（医師大河内存真と伊藤圭介も入湯を勧めているとある。二人は昌章の嘗百社仲間）、願が認められたという5月19日付文書、6月4日朝に榊原へ出立するとの発足届、6月23日に榊原から自宅へ戻ったとの帰宅届などから成る。

榊原は津の西、布引山地の麓にある温泉場である。文書によれば6月4日に名古屋を出てそこへ南行するはずなのに、実際はその日に伊吹山採薬のため、正反対の北に向った。のちの天保7年の2度の採薬では「御薬園御用」として公認で美濃や御嶽に出掛けたのだが、天保2年の際は昌章はまだ馬廻で、薬園との関係が無く、採薬にはこのような便法を使うほかなかったのだろう。採薬記によれば、名古屋に戻ったのは10日。これは想像だが、それから実際に榊原へ向って温泉に入り、23日に帰宅して届を出したのではないか。

（注1）大窪昌章は尾張藩士。志村家に生まれ、大窪太兵衛光風の養嗣子となり、文政7年には大窪家を継ぐ。初めは馬廻、のち大番。名は昌章、通称舒三郎、号^{へいれいあん}薜荔菴・蝸牛菴・蝸亭。水谷豊文に本草を学び、嘗百社の中軸の一人だった。天保12年（1841）10月8日没、年40（一説に39）。本報に記した資料Aは文政4年から始まるが、その冒頭には志村舒三郎と記されており、また資料Cでは文政3年まで「大窪＝貫」と呼び捨てにしているのに、文政4年6月頃の項に「大窪太兵衛様ヨリ貫」と「様」を付けており、以後は大窪家から貫うとの記載が消える。これらを勘案すると、大窪家の養子になったのは文政4年（1821）の後半ではなかろうか。

（注2）大窪昌章著『伊吹山採薬記』（国会図書館、特7-301、1冊）は、「天保二年卯五月勢州榊原へ入湯願之覚」と、資料B③中の伊吹山採薬品目録だけの写本で、行程などは記されていない。後者は『大窪舒三郎伊吹山採薬記』の題名で、『採薬志（1）』（科学書院、1994年）に影印されている。

（注3）資料Bの④と⑤を併せた自筆原本は大東急記念文庫に所蔵され、その翻刻が『随筆百花苑』第4巻（中央公論社、1981年）に「濃州信州採薬記」の題で所収されている。

（注4）上野益三著作集『草を手にした肖像画』（八坂書房、1986年）所収の「芹園図書」には、印葉図に注記されている地名から、昌章が立山・熊野・那智・伊豆などにも足を運んだように記されている。だが、資料Cを見ると、昌章は植木屋を通じたり、自園の草木との交換によって、これらの土地の草木を数多く入手している。したがって、印葉図の地名から行動範囲を推測することは出来ないと思う。

（注5）注2に記した『採薬志』の影印には、この資料は省かれている。

8 松岡玄達編・小野蘭山補訂『[校正] 救荒本草』

明・周定王朱橚撰『救荒本草』（1406年刊）は、救荒用草木414品の形状を簡潔に記載し、わかりやすい図も添える。それ故、江戸時代には講義資料としてしばしば用いられたが、その和刻本を最初に刊行したのは京都の本草家松岡玄達（1668～1746）で、享保元年（1716）のことだった。ただ、当時は『救荒本草』単独の刊本が手に入らなかったで、明の徐光啓が多少改編して『農政全書』（1639年刊）に収めた『救荒本草』の部分を玄達は抜き出し、明・王磐撰『救荒野譜』と明・姚可成撰『救荒野譜補遺』を添えた15冊本（救荒本草14巻14冊＋野譜・同補遺1冊）として出版したのであった。

ところが、天明8年（1788）1月30日の京都大火で、その版木がすべて失われた。京都の書肆長松堂は、玄達の門下だった小野蘭山に再刻のための校正を頼み、蘭山も快諾して、寛政11年（1799）に再版本『[校正] 救荒本草』が世に出た。

玄達の初版出版から数十年が経つあいだに、『救荒本草』の刊本も日本に到来していた。蘭山はそれに基いて、誤字脱字を修正しただけでなく、玄達の初版の欠点も直した。徐光啓撰の『農政全書』では、『救荒本草』「果部」の形状説明の個所が『農政全書』の別の部分を参照するように作られ、それをそのまま翻刻した初版には、当然ながら果部の形状記載文が無いという欠点があった（注1）。蘭山は、果部の全品に『救荒本草』の形状説明を加え、本来の姿を復活させたのである。その経緯は、蘭山の跋文「再鐫救荒本草跋」に詳述されている。

こうして蘭山が校訂・刊行した『[校正] 救荒本草』は9冊本として出版されたが、じつはこの再版本には「果部」が2個所にあり、それぞれに用いられている版木が異なる。上野益三著『年表日本博物学史』（八坂書房、1989年）などには、このことが記されていないので、蘭山による再版を調べはじめたとき、私は少々混乱してしまった。同じように戸惑う人がいると思うので、判明したことを記しておきたい。

『[校正] 救荒本草』の構成は次のとおりである。

冊1：『救荒野譜・同補遺』

冊2：『救荒本草』巻1

冊3： 〃 巻2・3

冊4： 〃 巻4・5

冊5： 〃 巻6・7

冊6： 〃 巻8・9

冊7： 〃 巻10～12

冊8： 〃 巻13・14（巻13果部は版木A）

冊9：『救荒本草』果部（版木B）＋蘭山の「再鐫救荒本草跋」＋刊記（注2）

冊8に使われている版木Aは、初版の誤字脱字を修正しただけで、形状の説明を欠く。どの品も、注釈の個所には、『農政全書』どおりに「詳見樹芸果部」（樹芸果部ニ、^{ツマビ}詳ラカニ見ユ）とだけ記す。用紙の版心は「救荒本草／巻十三」である。

冊9に使われている版木Bは、誤字脱字の修正とともに、形状の説明が入っている。版心は

「救荒補遺／巻九」（この「巻九」は9冊本の冊9の意味で、『救荒本草』の巻9ではない）。

結局、再版の冊1から冊8までは、初版の誤字脱字を修正した以外は、初版と実質的に変わらない。そして、冊9だけが果部の形状説明文を加えた「補遺」版なのである。蘭山は師の松岡玄達に敬意を払ったのだろう、初版を尊重して元の姿に近い形で再刻し、自分が大きく手を加えた分だけを「補遺」として別冊にした。それ故に果部が重複したのである。

構成が多少ややこしくとも、9冊本が本来の9冊のまま1組であれば、混乱せずに済むかもしれない。ところが、この9冊本の冊1と冊9はいわば附録的な性格（注3）なので、しばしば別扱いされて個々に登録されることがある。私が最初に調べた国会図書館白井文庫の再版9冊本がまさにそれで、3分割されていた。すなわち、冊1『救荒野譜・同補遺』が特1-848、冊2～8の『救荒本草』が特1-372、冊9『救荒本草』果部（蘭山補遺分）が特1-849となっている（注4）。冊1と9が昭和16年、冊2～8が17年と別れて図書館に入ったこと、冊1の題箋が失われていたことも重なって、別々に登録されてしまったらしい。もともと1組だったことは、3件の装丁も旧蔵印（水戸藩「稽医館印」）も同一だから、間違いはない。しかし、最初はこのような事情を知るはずもなく、各資料を個別に当たって戸惑ったのだった。

先人のなかにも「果部」の重複に悩まされたか、使いにくさに手を焼いたかで、再版本を再編集した人がいた。国会図書館蔵『[校正] 救荒本草』204-8本（6冊、榊原家旧蔵）がそれで、これは9冊本の冊8の「果部」を取り去って冊9の形状説明入り「果部」に入れ替え、冊9にあった「再鐫救荒木艸跋」と刊記を巻14の最後に組み入れている。初めは書肆がそのような刊本を後刷本として出したのかと思ったが、そうではないらしい。

（注1） 果部だけでなく、果部に続く葉部の最初の3品も形状説明が欠けていた。また、初版の果部では、葉を黒くすべき個所が白いままになっている場合が幾つかある。蘭山は、これらも修正した。しかし、葉部や葉の件を一々記述するとややこしくなるので、本稿では果部の形状説明の有無に絞って話を進める。

（注2） 「寛政十一年己未三月再刻／皇都書林 長松堂大路次郎右衛門」

（注3） とくに冊9は、単独でも販売したらしく、しばしば1冊だけで登録されている。

（注4） このように分割すると、『救荒本草』（冊2～8）には蘭山の「再鐫救荒木艸跋」が欠け、刊記も無く、果部の様式も初版と変わらないので、「校正」「再刻」の文字が入った題箋が無ければ、享保版と誤認しかねない。

9 『本草図譜』の謎

岩崎灌園の代表作『本草図譜』92冊（巻5～96、注1）に関しては、灌園自筆の献上・配布手控『本草図譜記』（国会図書館、特1-2972）が現存する。また白井光太郎は、岩崎家蔵の資料に基づくと思われる献上の詳細を『[改訂増補] 日本博物学年表』に記し、灌園の『天保十三年寅年日記』や『由緒書』を『本草百家伝』の岩崎灌園の項に残した（注2）。一方、北村四郎は、諸本10点以上を精査した結果を『本草図譜』影印本の解題（注3）に詳述している。し

かし、これだけの資料や解説がありながら、『本草図譜』にはまだ謎が多いし、報告されていないこともある。

『本草図譜』は、巻5～8を刊本・巻9～96を写本で、幕府に献上し、また予約者に配布した。図譜完成から幕府への献上終了までを、従来の年表や解説に記されてきた通りにまとめると、次のようになる――

文政11年(1828) 11月15日 灌園、『本草図譜』の自序を記す。この頃、原本が完成か。

文政12年(1829) 9月13日 『本草図譜記』によれば、出版のために西村^{ひろよし}広休から30両を借りる。担保は太閤牛印[朱印?]横物と『本草図譜』の写本(巻45が9冊、巻46が7冊など、計38冊)。

天保元年(1830) 4月 刊本山草部4冊(巻5～8)を幕府へ献上。

9月 刊本の刊記によれば、山草部巻5～8と芳草部巻9・10をこの月に刊行。一般予約者への山草部配布開始はこの頃か。

天保6年(1835) 11月 写本芳草部4冊(巻9～12)を献上。以後は、ほぼ毎年写本を4～12冊ずつ献上。一般への配布も同じ。

天保12年(1841) 8月 菜部4冊、11月菜部の次の4冊を献上(巻52まで済む)。

天保13年(1842) 1月29日 岩崎灌園没。

4月 子息正蔵(信正)が巻53以降の献上を再開。

弘化元年(1844) 8月14日 全巻(巻5～96、92冊)を幕府へ献上し終わる。

この経過には、3つの謎がある。第1は借金の件：文政12年に西村広休は14歳、そのような少年から本当に借金をしたのか。第2：刊本巻9・10も天保元年9月に出版されたというが、献上・配布の形跡が無い。本当に、このとき出版されたのか。第3：天保元年の献上・配布から次の献上・配布まで、なぜ5年もの空白があったのか。

まず、借金の謎を取り上げる。

『本草図譜記』には「丑九月十三日、本草図譜彫刻入用金之内三十両、西村三郎右衛門より借用致し候……」と記されており、この「丑」は文政12年丑年だと白井光太郎が推定した。西村三郎右衛門は西村広休(1816～89)で、のちに博物家として名をなす人物である。しかし、この年わずかに14歳。すでに伊勢相可の富商西村家の当主だったので金を貸せる立場であるし、西村家は江戸に出店も持っていたが、広休が山本亡羊に入門するのは翌年の天保元年である。本草への志はあったとしても、岩崎灌園と知り合っていたとは思えない。

この件ではほかにも謎がある。『本草図譜記』によれば、借金の担保にした『本草図譜』写本は巻25～巻48の計38冊で、巻29が6冊・巻45が9冊・巻46が7冊など同一巻で複数冊のものが幾つもある。明らかに原本ではなく、配布用の写本に違いないが、刊本出版を計画している最中に、写本を、しかも配布予定からすれば相当先の分をわざわざ作るだろうか。

しかも借金の件は、同じ頁の「内藤駿河守殿、子八月、初より御誂、山草、十月芳草……」という書き込みの直後に記されている。この「子」は、どうみても天保11年である。

以上のことを考え合わせると、「丑」は文政12年ではなく、次の丑年、すなわち天保12年で

はないか。この年には西村広休も26歳、すでに尾張で物産会を主催したこともあり、博物家としても名が知られていた。当主として江戸店にも何回か足を運んだらうから、灌園と知己になっていたとしても不思議ではない。借金の件は天保12年で、刊本「芳草部」巻9・10はその金でこのとき版刻されたと私は考える。天保12年頃であれば、写本が数多く出来上がっていたのは当然だし、同年8月に菜部巻45～48を幕府へ献上しているのだから、予約者への配布用に巻25～48が手元に置いてあって、それを担保にしたのは自然の成行きといえる。

思うに、灌園は刊本山草部巻5～8の出版・配布の後も、続いて刊本を出す予定だったに違いない(注4)。しかし、おそらく資金の点で事がなかなか思うようには運ばない。あれこれするうちに数年が経ってしまい、遂に版刻を断念して、写本の配布に切り替えた。そのため、最初の献上と第2回目の献上のあいだに5年余の空白が生じてしまったのではないか。

それから写本を次々に配布したわけだが、やがて灌園は病む身になった。それが何時のことかはわからない(注5)が、灌園は万一自分が世を去ったときを考え、改めて出版を企てたのではないだろうか(注6)。そして天保12年9月に西村広休から借金をして、まず「芳草部」巻9・10を刻したのだと思う。『天保十三年寅年日記』の天保13年1月21日条に「正蔵……山城屋より山草一部芳草二部かり〔借り〕帰る」とあるが、この山城屋は刊本『本草図譜』巻5～10を出版した書肆である。したがって、上記の「山草・芳草」は刊本に違いなく、このときまでに「芳草部」の刊本も出来上がっていたのである。ただ、こうして灌園が苦心して刊本化を再開したものの、今度も版刻は続かなかった。灌園の遺業を継いだ子息正蔵が、写本継続の方が手早いと判断したのであろう。事実、灌園没後2年半で全巻の献上を終えている。

『本草図譜記』にある借金の件の「丑」を文政12年ではなく、天保12年とすれば、前述の3つの謎がこのように解ける。

*

*

*

今回『本草図譜』を調べているあいだに、上の謎とは別に、今まで知られていないと思われること、あるいは断片的にしか報告されていないことにも、幾つか気付いた。以下、それを挙げておく。

●『本草図譜』写本には、各巻巻頭に「岩崎常正著」とだけ記すものと、「岩崎常正著／男岩崎信正・門人小山広孝校」と校正者の名が入るものの2種類がある。後者は灌園没後に作成されたものだが、校正者の名が入る巻は資料によって異なる。神宮文庫蔵西村広休旧蔵本(同朋社影印本、1980～81年)と国会図書館蔵特1-545本では巻61から、同館蔵田安家本(に25)と同館蔵別9121本は巻65からである。

●配布本(注4参照)中の写本には、枝・葉・実などの数が他資料の図より少なかったり、葉脈の筋がやや省略されていたりする「手抜き本」がある。たとえば、国会図書館蔵特1-545本には、そのような巻が混じっている。管見によれば、国会図書館蔵田安家本(に25)がもっとも整っており、図も良いと思える。田安家は徳川御三卿の一つだから、丁寧に描いたのだろう。

●「芳草部」刊本巻9・10は、写本と構成が異なる。すなわち、刊本巻9は写本巻9+巻10、

刊本巻10は写本巻11+巻12に相当する。ただし、内容は写本とほぼ同じである。

●刊本の後印本——前述のように、巻5～8は天保元年に、巻9・10は天保12年末か13年初頭に作られたと考えているが、この版本で6冊揃いの版が、何回か刷られている(注7)。

①初版本(天保12年か13年):刊記「文政十三庚寅年九月/江戸書林 須原屋茂兵衛・山城屋佐兵衛」で、玉山堂(=山城屋)の広告が無いもの。

②幕末本:①と同一刊記だが、最後に玉山堂の出版物広告5丁が入る。広告の掲載書名から、元治・慶応年間刊行かと思われる。

③明治初年本:刊記は「三都書林」として京都1・大坂2・東京6の書肆名があり、年記は無い。住所記載の様式や文字の使い方から、明治初頭の版と思われる。

④明治36年(1903)本:奥付に「明治三十五年十一月購版/明治三十六年五月発行」「発行者大橋新太郎/発兌元博文館」とある。『明治書籍総目録 明治39年版』(ゆまに書房,1985年)の「本草図譜 岩崎灌園 六冊 一円五十銭 博文館」に当たる。

(注1) 理由は不明だが、『本草図譜』は巻1～4が無く、巻5から始まって巻96で終わる。

(注2) 白井光太郎著『[改訂増補]日本博物学年表』(大岡山書店,1934年)所収の献上記事は、上野益三著『年表日本博物学史』(八坂書房,1989年)に再録されている。この献上年月や献上した巻数などは、『本草図譜』所収のものと多少異なる個所がある。また、『本草百家伝』は『白井光太郎著作集』第6巻(木村陽二郎編,科学書院,1990年)に所収されている。それに含まれる『天保十三年寅年日記』は、灌園が没するまで1ヵ月足らずの分しかないが、『本草図説』の写本作成作業がどのように進められたかを示す唯一の資料でもある。

(注3) 北村四郎,岩崎灌園『本草図譜』解説、『花の研究史』(北村四郎選集IV),95-145,保育社,1990年。神宮文庫蔵西村広休旧蔵本の影印本(同朋社,1980~81年)の解説として書かれたもので、『本草図譜』についての基本文献。

(注4) もし巻9・10が天保元年に刷られていたのなら、当然それを配ったはずである。だが、配布本と推定される『本草図譜』(版心に「灌園閣蔵」とある用紙を用いているもの、計7組;注3文献,124頁)のどれにも、刊本巻9・10は見当たらない。ということは、この2冊が天保元年には刷られていなかったことを物語る。これまで、「山草部」巻5～8の4冊だけでなく、「芳草部」巻9・10の2冊も天保元年(文政13年)刊とされてきたのは、山草・芳草を1組にした6冊本の刊記が芳草部巻10にあり、その年記が「文政十三年」になっているからである。しかし、前編に続いて後編を出版し、両者を併せて1組にして売るとき、前編の刊記の年記を直さずに後編の最後に付けるのは、珍しいことではなかったらしい。たとえば、岩崎灌園の『草木育種』は文化15年(文政元年)に初版、天保4年に後刷が出た。その後、天保8年に弟子の阿部喜任が『草木育種後編』を出したのだが、前後編を併せてセットにした本のなかには、後編に付された刊記の刊年が「天保4年」のものがあって、時に誤解を招く。この『草木育種』の前後合編を出

したのは、ほかならぬ山城屋、『本草図譜』の出版元であった。

(注5) 天保9年(1838)7月27日に、灌園は病を理由に隠居を認められている。もっとも、その時点で「病」が口実だったのか、本当に体が悪かったかはわからないが……。

(注6) 写本を作るには、そのつど執筆者本人が校閲しなければ不正確になりかねない。一方、執筆者が正確な図の版木を作っておけば、それは何時までも使える。そのような点を灌園は考慮して、再び出版を選んだのではないか。

(注7) 江戸時代の版木をそのまま使用した『本草図譜』6冊本とは別に、明治17年(1884)刊の『本草図譜』がある。これは図を石版で作り直し、漢名・和名のほかに科名を記載、またローマ字の漢名・和名と学名も加えたもの。表紙は茶色で、中央に「本草図譜 山草部」、その右に「故岩崎常正著／小野職愨校閲／鶴田清次補正」、左に「九臯堂蔵版」と記す。本文直前の中扉には、表紙の3名のほかに「荒井延次郎画／浦井韶三郎画」、奥付には「明治十六年九月十日版權免許／同十七年七月出版御届／出版人鶴田清次／発兌元丸屋善七・東洋館書店」とある。『版權書目広告』明治16年9月10日付に「本草図譜・附本草図譜目録、大本五拾冊・小本壹冊、岩崎常正著・鶴田清次出版」と記すものに相当する。小野職愨・鶴田清次の両者は博物局(現東京国立博物館の前身)に勤務していたから、博物局が一枚噛んだ企画かもしれない。ただし、出版されたのは山草部1冊に終わったようである。なお、本書巻頭には岩崎灌園の肖像画がある。これは灌園の姿を唯一伝えるもので、多くの著作で目にするのはこの肖像である。例言によれば、竹本正興の描いた原画を荒井延次郎が石版に彫った。竹本は幕臣で、文政5年(1822)1月9日に生まれ、明治21年(1888)1月1日に没した。名は正興、通称又八郎、号石亭・対松堂。詩文・狂歌・俳句で知られ、本草にも通じていた(森繁夫編、『名家伝記資料集成』, 思文閣出版, 1984年)。

10 『重訂本草綱目啓蒙』への書き込み

小野蘭山著・井口望之校訂『重訂本草綱目啓蒙』(弘化4年刊: 国会図書館, 特1-275本)を調べていて、その上欄に代々の所蔵者が残した書き込みが数多くあり、興味深い記述も見られるのに気付いた。本書には「青山求精堂蔵書画之記」と「森氏」の旧蔵印がある。前者は誰のものか不明、後者は森立之である。書き込みは3人ほどの手になるようだが、筆者が確認できるのは立之だけで、後は特定できない。以下に幾つかの書き込みを採録しておくが、これは立之ではなく、栗本丹洲の知己だったと推定される人物が記したものである。

●第43巻, 13丁ウ: 栗本氏〔栗本丹洲〕曰、朝鮮ヲシドリ舶来アリ。享保ノ頃、予祖父〔栗本昌綱、二代瑞見〕拝領スルモノ、アヒル・カモヨリ大也。頭上ニ長黒毛アリテ、杏黄色ノ毛ナシ……。

朝鮮ヲシドリは、すでに絶滅したとされるカンムリツクシガモである。享保年間、幕府は朝鮮薬材調査のときに同国から雌雄数対を取り寄せた(注1)が、そのカモが栗本丹洲の祖父に下賜されたというのは初耳である。

- 第44巻，14丁ウ：栗本氏曰，琉球ノ八重山蝙蝠アリ。予幼時，不忍弁天^{しのばず}ノ開帳アリ。時ニ衆観場ニ出。其大サ兎ノゴトク，毛色ハ黄赤ノ褐色也……肉翅ヲ展ル時ハ五六尺アリ。雨傘ノ如シ。甘藷ヲ生ニテ食フ。又，小ナルモノモ多【ク】将来ス。

丹洲は宝暦6年（1756）生まれだから，その幼時は宝暦末年から明和の頃，つまり1760年代か。丹洲の代表作『千虫譜』にオオコウモリがサツマイモを食っている図があるが，その折のものではないにしても，しばしば渡来していたことは間違いない。

- 第45巻，12丁ウ：文化八年辛未夏五月三日，紅毛将来ノ紅風鳥ト云モノヲ観ル。大サツグミホド，頭ヨリ尾ニ至リ四寸許。其尾至短尾，牴ヨリ硬黒線二条ヲ出スコト長又四寸許。其端キリキリト巻幡リテ，キサゴノ状ニ似タリ。上面深緑金色ノ光アリ。裏面茶褐ニテ光ナシ。味^{くちばし}尖利白色，頭背至翅深紅，帯黒緑色……右栗本氏説。

フウチョウの一種であるヒョクドリらしいが，剥製であろう。美しい鳥なので，フウチョウ類の剥製は時折持ち込まれていた。

- 第47巻，34丁ウ：文化八年，長崎鎮台〔奉行〕土屋紀伊守，〔ハリネズミ〕活者一頭ヲ得テ，東都将来ス。途中誤テ放ツ。トラエントシテ，家従打コロス。其全皮ヲ剥テ将来スルモノ，長サー尺五寸ホドアリ。全身豪猪〔ヤマアラシ〕ニ似テ小シ。針アル毛ハ背上ノミニシテ，其外ハ褐色ノホソキ毛アラアラトアリテ，密ナラズシテ，下地ノ肌見ユルモノナリ。

文化6年（1809），清からハリネズミが渡来した（注2）。その個体か。モグラなどと同じく原始的な哺乳類の食虫類に属し，中国・朝鮮には生息するが，日本には産しない。

（注1） 田代和生，『朝鮮薬材調査の研究』，慶應義塾大学出版会，1999年。磯野直秀，『九淵遺珠』：丹羽正伯の物産記録，慶應義塾大学日吉紀要・自然科学，17号，1-6，1995年。

（注2） 磯野直秀・内田康夫編，『舶来鳥獣図誌』，八坂書房，1992年。